

「兄弟として諭しなさい」第Ⅱテサロニケ3章14-18節

今日でこのテサロニケ人への手紙第Ⅱの講解説教も最後となります。最初に学びましたようにこのテサロニケ人への手紙の主題は「キリストの再臨」であります。特に、テサロニケ教会の信者の中には、このキリストの再臨の教えを悪用して、仕事をせずにお節介ばかり焼いている怠惰な者たちがいたのです。そこでパウロは6節でテサロニケ教会のクリスチャンたちに対して、「そのような怠惰な歩みをして、私たちから受け継いだ教えに従わない兄弟は、みな避けなさい。」と警告しています。そして今日の14節では何故そのような態度を取るべきかが語られています。パウロはここで「もし、この手紙に書いた私たちのことばに従わない者がいれば、そのような人には注意を払い、交際しないようにしなさい。その人が恥じ入るようになるためです。」と命じています。つまりパウロは教会がこのような厳しい態度を取る理由は「その人が恥じ入るようになるためだ。」と言うのです。この「恥じ入る」というのは、自分の行っていることが神の前にも人々の前にも恥ずかしい行為である、罪であるということに気づく、認めるといふことでもあります。それは当然のことながら、もはやそのような恥ずべき行為を辞めて、その罪を悔い改めるようになるということなのです。そして、このように怠惰な者たちを恥じ入らせることは彼らだけでなく教会の他の兄弟姉妹たちへの警告でもありました。パウロはこのように怠惰な生き方、不従順の罪が他の兄弟姉妹たちにも伝染して、広まることのないように、このようなことを命じているのです。ですからパウロはここで牧会者として、このような怠惰な者たちがその罪を悔い改め、主にある兄弟姉妹として教会の交わりに復帰することを何が何でも願っていたのです。つまり、パウロは彼らを教会から追い出すのではなく、彼らが自分たちの行いを恥じ入り、罪を悔い改めて本来の姿に立ち返ることを願っていたのです。

それでは6節の「みな避けなさい。」とか、この14節の「交際しないようにしなさい。」ということは具体的にどのようなことを指しているのでしょうか。宗教改革者のカルヴァンという人はこの命令は、パウロたちの訓戒に従わない者は破門という懲罰を与えることが必要であることを命じているのだと解釈しています。それはパウロたちのことばに従おうとしない者はパウロに対してではなく、イエス・キリストご自身に対して反逆し、不信仰になっているからです。神に反逆しているのです。そのためパウロはこのようにクリスチャンは厳しく罰せられなければならないことを教えているのです。ところがパウロはその後、突然その厳しさに手心を加えているといえるように思えます。それは15節で「敵とは見なさないで、兄弟として諭しなさい。」と命じられているからです。それは破門という処罰も、罪を犯した人々を主の羊の群れから追い出すことを目的として行うものではなく、むしろ道に迷った彼らを主の御許に連れ戻すことを目的としているからです。しかし教会でこのような破門という戒規を執行するとなりますと、罪を犯した者を敵のように扱う危険があることをパウロは知っていたのです。だからこそ、罪を犯した者がまだ教会員であるゆえ、主にある兄弟として諭すようにと警告しているのです。何故なら、悪いこと、罪をそのまま放置すること、見過ごすことは決して真の兄弟愛ではないからです。教会が神の家族であり、そこに連なる信徒一人一人が主にある兄弟姉妹であると本当に受けとめているのならば、その罪を辞めさせるように行動することは当たり前のことなのです。しかしこのように教会が戒規処分を行い、罪の悔い改めを促がそうとする時、様々な困難が伴います。まず、私たちは人の罪を指摘しようとする時に、それを躊躇してしまうところがあるからです。それは自分にも罪があるではないか、そんな自分に人の罪を指摘する資格などないと考えてしまうからです。さら

には罪を指摘することによって、その人から恨まれたり、その人との関係が悪くなってしまうのではないかといった自己保身の思いがでてきたりするからです。また、この戒規処分のもっと難しいところは、その罪を指摘された人が罪を認めず悔い改めない場合であります。そうしますと、教会はその人と対立関係になったり、その人が教会を去るということが実際に起こってくるのです。そしてその教会を去った人は別の教会に行って何もなかったかのように平気な顔で教会生活を送るようになり、かえって自分の罪を指摘した教会の悪口を言うようになるのです。しかしそれでは全然神の前に正しい罪の解決がありません。そのような人は罪を悔い改めていないものですから、また別の教会で同じ罪を犯し、教会を混乱させるということが起きるのです。ですから、私たちこの手紙を通して罪を犯している兄弟姉妹たちに対して教会戒規を正しく執行することがどんなに大切なことであり、また困難なことであるかを深く教えられるのです。

そして、パウロの牧会者としての愛の心は 16 節のパウロの祈りに最もよく表されていると言えます。パウロは 14-15 節で罪を犯した者に対して厳しい処置について語った後に、「平和の主があなたがたに平和を与えて下さいますように。」と祈っていますが、何故ここでパウロは平和について祈っているのでしょうか。私はここでパウロが祈っている平和とはテサロニケ教会の兄弟姉妹同士の平和ではないかと思えます。特にパウロがここで祈っている平和とは戒規処分を執行した教会の兄弟姉妹たちと戒規処分を受けた兄弟姉妹との平和であります。それはパウロが厳しい戒規処分によって、この人たちが罪を悔い改めて、主にある兄弟姉妹としてもう一度回復されることを前提にして祈っているからです。しかしその罪を指摘される者は、そこに本当に自分の犯した罪を悲しみ、悔い改める心がありませんと罪を指摘した者たちを恨むようになり、平和な関係を保つことが難しくなるからです。だからこそ、パウロはその罪を犯した兄弟姉妹が罪を悔い改めて主の御許に立ち返り、主にある兄弟姉妹として教会に受け入れられた時のことを考えて、「平和の主ご自身が、どんな時にも、どんな場合にも、あなたがたに平和を与えて下さいますように。」と祈っているのです。パウロはこのような処罰はあくまでも敵としてではなく主にある兄弟姉妹として行いなさいと言うのです。それはその人が罪を悔い改めて教会の交わりに回復されることを祈りつつ行うということです。その戒規処分の動機として愛が大切である、愛のゆえにそれを行うということです。私たちは愛をはきちがえてはならないのです。罪を見過ごすことが愛なんかではないのです。その罪を主の前に、教会の前に悔い改めることこそ大切なのであります。

最後にパウロは「自分の手であいさつを記します」と言ってそれを実行しています。それは 2:2 で語っているようにテサロニケ教会のクリスチャンたちが偽物の手紙とパウロの手紙を間違えないようにするためでありました。ギリシャ・ローマ世界の当時の習慣としても手紙を他人に筆記させ、最後に本人が自筆で署名するやり方が良く行われていたようです。パウロはいよいよ筆を置くにあたって、溢れるばかりの愛を込めて最後に祝福の祈りを捧げています。(18 節) パウロの口からは、「主イエス・キリストの恵み」以外何も出て来ません。それは「主イエス・キリストの恵み」こそ、テサロニケ教会を支えている基盤であるからです。今日の私たちの教会も 1 世紀のテサロニケ教会の時代以上に、イエス・キリストの再臨が益々切迫していると言えます。そのような中で、キリストの再臨を巡って様々な異端がはびこり、間違った教えを宣べ伝えています。私たちはこのような時代の中にあって、益々、健全な聖書の教えに堅く立ち、健全な教会を建て上げ、健全な福音を宣べ伝えてゆきたいと思うのです。そしていつキリストが再臨されても良いように目を覚ました生活を送り、キリストに対する生きた信仰をもって、今与えられている仕事に忠実に励み、今遣わされている教会にあってキリストのからだなる教会を建て上げ、主の御業に励む者になりたいものです。